

或時同國江○近 犬山城の近邊燒働として、信長公未明に打出給ふに、馬に乘いさめる者有、誰ぞと宣へば、木下藤吉郎秀吉とぞ名乗ける、その、ち程へて、鴨鷹の爲、曉がた出させ給ひつ、誰か有ぞと尋させられけるに、藤吉郎是に候と答奉る、敬上盡臣職者は、必公庭に隙なしと、聞しが、近年藤吉郎が勤め、實に左も有ぞかしと、御感之御氣ざし、始て有けり、如此勤め行、漸日を累、年月を経しかば、直に御用を奉る程に成にけり、

〔鹽尻七〕大谷刑部少輔吉隆は、初め洛東大谷の修験者なりし、豊臣秀吉弱冠の節、其花押をうらなひて、必武將となるべしといへり、秀吉漸く名をあらはし、一方の將となられし時、金を大谷に贈られしに、修験者即ち甲冑を調へ、武士となり、其後しばく軍功ありしが、秀吉に屬して、刑部少輔に任せられしとかや、

〔藩翰譜十一〕大御所家康 正信多○本を見給ふ事、朋友の如くにて、將軍家秀忠○徳川は長者を以て待せ給ふ、正信も又常に大御所を呼びて、大殿といひ、將軍家をば、若殿と呼、軍國の機事に至て、其謀る所、言葉多からず、一言二言にて盡せるよし、諷諭に長せる人と見えき、始め大阪にて、大名七人、石田治部少輔三成を討んとす、徳川殿人々を制し給ひしに、因て、事平らぎぬ、其時伏見の御館にて、正信御前に参りしに、其夜は未だ亥の半なるには、や御殿ごもりあり、正信打咳きく参り、此夜ははや御寢ならせ給ふと申す、徳川殿いま何事かありて参ると、仰せられしに、正信、別の事にも候はず、石田が事、いかにや思召すと申す、されば今其事をこそ思ひ謀れと仰せらる、正信さては心易くなつて候ふ、其事思召しはかられん上は、正信何事か申すべき、御暇給るべしとて罷り出づ、徳川殿又仰せらる、旨もなし、其時に土井大炊頭利勝、御傍に在つて承りきと、後に石谷將監に語りしなり、

〔常山紀談十八〕覺兵衛田○飯云けるは、我一生、主計頭清正○加藤にだまされたり、初て軍に出て功名し